

保存部材運び込みから十年

続・聖堂再建プロジェクトの終了式を四月七日に挙行

御受難会のご好意で、鹿兒島のザビエル旧聖堂の保存部材を福岡県宗像市の同修道会宗像修道院と「福岡黙想の家」が立っている敷地内に運び、十年が過ぎました。



この地での経過を簡単に申し上げますと、起工式を二〇〇七年四月十五日に行いました。その時には四年間で完成させる計画で「聖堂再生プロジェクト」を発足させ、四年目の二〇一一年四月十日に福岡教区長の宮原司教様に中期祝福式をして頂きました。その時、未完成をお詫びしながら、二年の予定で「続・聖堂再生プロジェクト」立ち上げ、工事を続けました。まだ、ご像、十字架、説教台等設

置されておりませんが、建造物としては工事を終え、この三月中旬に竣工検査を受ける運びになりました。六年間にわたる温かいご支援の賜物と感謝していただきます。ありがとうございます。

そこで聖ザビエルの誕生日にあたる四月七日(日)午後二時から、現地において「続・聖堂再生プロジェクト」の看板を降ろし、ご協力をいただいた多くの

方々に感謝を込めて、終了式を開催します。そして今後はNPO法人文化財保存工学研究室は「便所・管理棟」への建設に努力していきます。

今年の中高生の長崎巡礼

テーマは「みことば(信仰)を生きるとは」

毎年恒例の中高生の長崎巡礼を今年も四月一日(月)から二泊三日の予定で実施すると泉浩二神父(教区青少年担当司祭)は発表し、参加者を募集している。

今年のテーマは「みことば(信仰)を生きるとは」で、泉神父は殉教者たちが

信者と共に歩む司祭

司教執務室だより

三月は叙階式に復活祭と大きな出来事が続く。とくに、二か月連続での叙階式というのは、教区始まって以来の慶事に違いない。

司祭に叙階された当初、毎日のミサは、緊張の連続だった。しかし、ミサの式次第にも慣れてくると、ミサのいろいろな祈りにも心を止めるゆとりも生まれてきた。そして、一番驚いたのは、「これはあなた方のために渡される私のからだ」という聖変化の言葉だった。私のからだ、に驚いたのだ。せめて、「：渡されるキリストのからだ」なら気が楽なのだと思うものだ。「渡される私のからだ」となる

と信者に向かって「渡します！」と宣言していることになるのではないかと、と恐れれたからだ。その恐れから解放されたのは、「キリス



トのからだ」と言って差し出したご聖体を「アーメン」と言って受け取る信者たちの応答の言葉だった。「：渡されるキリストのからだ！」「ハイ、分かります。私もあなたのように生きます。アーメン」という宣言だと気がついたからだ。そうか、信者たちと一緒にできるかもしれない、と思えた時、信者たちが頼もしい同伴者に思えたのだ。そして、心が軽くなった。

それ以来、アーメンが、司祭として、また主の道をたどる一人の求道者として生きるための鍵となる言葉になった。そして、アーメンがマリア様の「なれかし」に始まり、十字架上での「委ねます」に至るまで一貫した聖家族の合言葉だったに違いないとの確信となり、やがて「それでも」に結実した。司祭職の道を歩み出す三人へのはなむけの言葉となつたらうれしい。

短信

吉野教会で堅信式

一月二十日(日)吉野教会(牧山田一神父)で堅信式があり、昨年クリスマスに受洗した二人が郡山司教から堅信の恵みを受けた。

スピリチュアル研修会

臨床パストラル教育研究センター九州ブロック主催のスピリチュアル研修会

信仰を通してみことばをどのように受け止め、そして生き抜いたのかを確認したいとしている。対象は中学生と高校生

で、今春中学生になる人も参加できる。参加費は一万五千円で、離島からの本土までの旅費は主催者が負担する。参加希望の人は泉浩二神父まで(☎099-9912571・099-9912571)。申込締め切りは三月二十四日(日)となっている。

が二月十六日(土)教区本部で開かれ十三人が受講、中島保壽牧師(日本キリスト教団)から「痛みのあるコントロール」について学んだ。

侍者を募集

教区召命担当では、三月二十日の叙階式で侍者してくれる子どもたちを募集している。希望者は教会ごとに泉浩二神父まで。申込締め切りは三月十七日。

会と催し (3月)

- 3日(日) 四旬節第三主日
 - 4日(月) 奄美信仰養成講座・聖心教会・9日まで
 - 10日(日) 四旬節第四主日
 - 11日(月) 田原章神父叙階六十周年感謝ミサ・ザビエル教会・16時
 - 14日(木) 柳本繁春神父叙階記念(一九六四年)
 - 16日(土) 宣教学校・教区本部・13時30分
 - 17日(日) 四旬節第五主日
 - 18日(月) 田原章神父叙階記念日(一九五三年)
 - 18日(月) レデンブートル会例会
 - 19日(火) 岡俊郎神父叙階記念(一九六六年)
 - 19日(火) 聖ヨセフ
 - 19日(火) 大野和夫神父、牧山田一神父、岡俊郎神父、柄尾泰英神父霊名
 - 20日(水) 丸野六雄神父叙階記念(一九七七年)
 - 20日(水) ゼローム神父命日(二〇〇三年)
 - 20日(水) 司祭叙階式(ソン・ジン・ウク・ドミニコ助祭、ジョン・ポップ・ジョン・アントニオ助祭)・ザビエル教会・14時30分
 - 21日(木) 郡山健次郎司教叙階記念日(一九七二年)
 - 21日(木) 永山幸弘神父(一九六八年)、寝占敦之神父叙階記念(一九八三年)
 - 21日(木) 美島春雄神父(一九六七年)、小隈憲士神父(一九八八年)、大松正弘神父(一九八七年)末吉卓也神父(二〇〇三年)、石田望神父叙階記念(二〇〇三年)
 - 24日(日) 受難の主日(枝の主日)
 - 24日(日) 世界青年の日
 - 25日(月) 山口好信神父叙階記念(一九九一年)
 - 25日(月) 泉浩二神父叙階記念日(一九九三年)
 - 27日(水) コンタリーニ神父(一九九八年)、島田喜藏神父命日(一九四八年)
 - 28日(木) 聖木曜日(主の晩さん)
 - 28日(木) 聖香油ミサ・ザビエル教会・10時
 - 29日(金) 田邊徹神父叙階記念(一九五一年)
 - 29日(金) 明松尊吉神父命日(一九九二年)
 - 29日(金) 聖金曜日(受難の主日) 大斎・小斎聖地のための献金
 - 30日(土) 聖土曜日
 - 31日(日) 復活の主日
 - ▼河野純徳神父命日(一九八九年)
- 祈りの意向
- 【ノベナ】洗礼志願者のため(23~31日)
- 【祈祷の使徒会】
- 一般・自然を大切にすること
- 教・聖職者
- 日本の教会・社会的孤立の解消

ザビエル書院の窓



高橋重幸著
憩いの水のほとりに
オリエンズ宗教研究所
定価・千五百円+税

わずか6節からなる詩編23。羊飼いである神とそれに養われる人間の深い絆と信頼を歌った詩。これを深く味わうための手引書。Tel.099-226-2430

1 二十六聖人の殉教と右近

慶長二年(一五九七年)、有名な日本二十六聖人の殉教事件が起こりました。理由は「豊臣秀吉がキリシタン国による日本侵略を恐れたから」と言われています。

西洋キリシタン国が宣教師をはじめに送り、次に貿易通商を開かせ、そして最後に軍隊を送って日本においてキリシタンになつた者たちに手引きをさせて、日本を植民地にさせることを危惧し、そのみせしめとして二十六人を処刑させたのです。ところが、その処刑者リストの最初に実は、高山右近の名前が記されています。右近は、高山右近の名前が記されています。右近は、高山右近の名前が記されています。

あつたことは言うまでもありません。すると三成は「右近は、天正十五年のバレン追放令の折、殿下(秀吉)によって処罰を受けている。既に処罰を受けた者を改めて処罰することはできない道理である」と述べて、右近の名をリストから削除させたのです。三成は、右近の名を削除したりリストを秀吉のもとに持っていくました。秀吉が「右近の名がないではないか。おかしいのお」と三成に問うと、三成は「右近は、既に殿下によって罰せられております。一度、罰した者を改めて罰することは筋が通りません」と答えました。むろん、この論法が詭弁であることは、三成も

助けようという気持ちを起こさせたといいことなのです。現代においても同じではないでしょうか。同じ危機にあつても人格のある人は助けられ、人格のない人は処刑されていくと言えりませんか。しかし、そうして助けられたにもかかわらず、右近は処刑される人々のうわさを聞くと「名乗りを挙げ、自分も処刑されるべき」と前田利家に告げたのです。利家の必死の説得により、思いとどまりましたが、ここに死をも恐れぬ、神への絶対的信仰を貫き通そうとする右近の強い信仰心を見ることができるといえます。

「人間には、強虫と弱虫があります。ここでいう強虫とは、いかなる障害があつても、最後まで自分の信念とか生き方を貫く人物を指しますが、私は強虫ではないので、これまで弱虫のことばかり小説に書いてきました」。しかし、また、こうも書いておられるのです。「私は、例外として、強虫のことも、書いています。小説で取り上げた人物としては、ペテロ岐部(「銃と十字架」と高山右近(「反逆」)がそうです。

キリシタンの歴史(11) 高山右近(下)

溝辺教会主任司祭

坂本 進

秀吉も知っていたのです。三成は、無二の親友であつたアウグスチノ小西行長から、右近を助けるよう頼まれていたのです。ご承知の通り、行長は右近の導きでキリスト教信仰に目覚め、行長にとつて右近は信仰の師匠でありました。光成は、無二の親友である行長から頼まれていたことに加え、自身も右近に尊敬の気持ちを持っていました。そして、豊臣政権の実力者・前田利家が右近を救おうとしていたと思惑も理解していたので、詭弁を弄して、右近を救つたのです。即ち、右近の人格・人柄が多くのまわりにいた人々に右近を

秀吉も知っていたのです。三成は、無二の親友であつたアウグスチノ小西行長から、右近を助けるよう頼まれていたのです。ご承知の通り、行長は右近の導きでキリスト教信仰に目覚め、行長にとつて右近は信仰の師匠でありました。光成は、無二の親友である行長から頼まれていたことに加え、自身も右近に尊敬の気持ちを持っていました。そして、豊臣政権の実力者・前田利家が右近を救おうとしていたと思惑も理解していたので、詭弁を弄して、右近を救つたのです。即ち、右近の人格・人柄が多くのまわりにいた人々に右近を

私が台湾の大学に奉職していた時、遠藤周作氏が講演に招かれたことがありました。氏は「キリスト教の信仰とは、強い父のような神を信じるといふより、弱さを持ちながらも、そんな自分があるまま受け容れてくれる母のような神を信じるのではないでしようか」と言われました。この氏の考え方は、『沈黙』の中で「踏み絵を踏んでもいいんだよ」と神がおしゃつておられると、転びパテレンに言わせた記述と軌を一にさせています。氏は「神様はお母さんの

右近がどのように強虫であつたかは、彼の生涯にまつた信仰によつて明白です。天正十五年、秀吉がバレン追放令を出した時、行長をはじめ有力キリシタン大名はみな、キリシタンを棄てることを言いました。しかし、ただ一人右近だけが、大名の地位を剥奪され追放されても信仰を棄て

ないと言ひ、追放されてしまつたのです。行長は、この時の自分の背信行為を生涯負い目としています。でも行長は、表面上、棄教とみせかけ権力者秀吉に気に入られるようふるまつたことによつて、追放された右近を匿い援助し続けることもできたのです。ある点において弱虫であつても、あつたか、彼の生涯にまつた信仰によつて明白です。

遠藤氏は、同書の中で、こう結んでいます。「右近は、家康のキリシタン国外追放に直面して、あきらめず動じた。この時、右近には国内にとどまる方法はいくらでもあつたのですが、彼は決して、それを望みませんでした。どのような迫害を受けようとも、宗教上の信念に生きるためならばと、むしろ喜んで、家族と共に小船で、マニラへ追放されていつたのです。が、その疲労がたつたので、マニラに渡つて間もなく病死しました。

みなさん、たとえ弱虫である我々であっても、強虫になることも必要なのではないでしょうか。いや、強虫になることができるのです。キリスト教会は弱い立場にある人々を受け容れる教会であると共に、右近のような強虫で、敬虔、かつなにもにも揺るがされずブレず、信仰一筋に生きることをできる人を、育てていく教会でもあるべきなのではないでしょうか。*次号には、『高山右近』補筆の章を記させていただきます。

2 石田三成の執り成し

秀吉は、キリシタンの背後にあるキリシタン国の侵略を恐れ、在日宣教師及び邦人指導者達を処分しようとして、処刑者リストを作らせる任務を側近第一人者の石田三成に与えたのです。三成は、部下にそのリストを作らせ提出させました。もちろん、そのリストの最初に右近の名前が記されて

秀吉は、キリシタンの背後にあるキリシタン国の侵略を恐れ、在日宣教師及び邦人指導者達を処分しようとして、処刑者リストを作らせる任務を側近第一人者の石田三成に与えたのです。三成は、部下にそのリストを作らせ提出させました。もちろん、そのリストの最初に右近の名前が記されて

秀吉は、キリシタンの背後にあるキリシタン国の侵略を恐れ、在日宣教師及び邦人指導者達を処分しようとして、処刑者リストを作らせる任務を側近第一人者の石田三成に与えたのです。三成は、部下にそのリストを作らせ提出させました。もちろん、そのリストの最初に右近の名前が記されて

秀吉は、キリシタンの背後にあるキリシタン国の侵略を恐れ、在日宣教師及び邦人指導者達を処分しようとして、処刑者リストを作らせる任務を側近第一人者の石田三成に与えたのです。三成は、部下にそのリストを作らせ提出させました。もちろん、そのリストの最初に右近の名前が記されて



故西本神父(レデンプトル会)とマニラの高山右近像前で

+KABAYAN SEKSIYON+
Pagkuhang Muli sa mga Yaman ng Vaticano II
Dahil sa kakulangan ng pagkaunawa ng mga Kristiyanong Katoliko tungkol sa mga Dokumento at Turo ng Vaticano II, marami ang naliligaw ng landas ng pananampalataya. Higit na nakakalungkot, ang iba ay may kanya-kanyang sariling paniniwala hingil sa pagsamba at pagkilala sa Diyos. Kaya marami mga Kristiyanong Katoliko ang tumititawag sa simbahan at naghahanap sila ng ibang paraan para sambahin din ang Diyos, kaya lang ang hindi nila mahanap-hanap dahil sa kakulangan sa pag-unawa ng turo ng Inang Simbahan, hingil sa mga dokumento ng Vaticano II.
Kaya sa unang araw ng "Taon ng Pananampalatay" na ipinahayag ni Papa Benedicto XVI, ipinagdiriwang din ang ika-50 taon ng pagbubukas ng Ikalawang Konsilyo Vaticano (Oktubre 11, 1962-2012), ang pinakadakilang kaganapang panrelihiyon sa nagdaang siglo.
Sa loob ng "Taon ng Pananampalatay" tinatawagan ang mga Katoliko na pag-aralan at pagnilayan ang 16 na mga dokumento ng Vaticano II at magsiyasat sa Katesismo ng Simbahang Katoliko. Nakatuon ang gawaing ito tungo sa higit na malalim na pag-unawa at pananagutan na isabuhay ang ating pananampalataya.
Sa Porta Fidei 5 (Pinto ng Pananampalataya), ang apostolic letter ni Papa Benedicto XVI, inulit ng Santo Papa ang mga salita ni Juan Pablo II na nanindigan na ang mga nilalaman ng Vaticano II "ay hindi nababawasan ng halaga o brilyo. Higit kailanman nararamdaman kong tungkulin kong tukuyin ang Konsilyo bilang dakilang biyayang ipinagkaloo sa Simbahan sa ika-20 siglo: ditto makakatagpo tayo ng tiyak na paggabay na aalalay sa pagharap natin sa siglong nagsisimula ngayon." Ang Vaticano II "ay maaaring maging tunay na makapangyarihan tungo sa di matatakasang pagpapanibago ng Simbahan."
Sinasabing "pagpapanibago ng Simbahan", ang ibig sabihin kasama din tayong mga mananampalataya na binabago ng mga turo ng Vaticano II. Tulad ng pagbibigay halaga sa yaman ng Vaticano II, na kung saan itinuro sa simbahan ang kagandahan at kahalagahan ng liturhiya at mga babasahin. Na dito natin nararanasan ang kagandahang-loob ng Diyos na ipinakita sa atin diyan sa kanyang Bugtong na Anak na si Jesukristo.
Huwag natin balewalain ang mga yamang ito na magsisilbi sa atin gabay sa pagpapalalim ng ating pananampalataya at ang pagpapahalaga sa turo ng Panginoon na inihatid din sa atin sa pamamagitan ng kanyang mga alagad na ipinaabot din sa atin, bilang kasapi ng Simbahang Katoliko.
Katesismo sa "Taon ng Pananampalataya (Fr. Dino Orolfo)